Q：平和教育でウクライナでの武力紛争をどう扱うか？

現状把握

大学生の受け止め方…自分ごとにするのが難しい
「徴兵」について扱う
非暴力主義での抵抗の可能性もあるが、理想的な平和が見い出しにくい
「逃げます」が多い

戦争の原因にアプローチするために平和教育は必要

平和構築～ウクライナの再生を展望する目的を設定できる

教材研究

難民支援の自治体の取り組みも重要

題材をひとつに特化すると、他を否定する要素も出てくる可能性がある

単に被害／加害の両面を扱うだけで安心してよいのか？
安全保障／被害者の観点
どちらが正しい／悪いが目的ではない

「ロシア悪・ウクライナ善」の捉え方以外の考え方が必要
第三者たちの見方、国連の機能不全も含めて扱うべき

長い視点でロシア理解に努めてみる必要がある
（言語や文化、大飢饉の映画、歴史、国内の多様性）

自分ごと／自分ごとでない　双方について扱い方に難しさもある

改めて現在の情勢を捉え直す必要がある

ロシアとウクライナの関係についても扱う

ロシアを追い込んだ外交についても学ぶ

留意点

子どもの何を育てるのか、という観点が重要

グローバルな視点から「特攻」をテーマにした学習の例（韓国の先生方と）

マスコミの情報の捉え方が重要

国連の機能不全、５大国中心のままでよいのか、日本は何ができるのか

「国連幻想」を乗り越える体制が必要

日本の戦争へと、どのようにつなげるか？
「構造」を見ていくべき

授業案

若い先生方が積極的に扱っている

戦場ジャーナリスト（西谷さん）を授業ゲストに、これからどうすればよいか、を投げかけてみる

「切実性」論争・追体験
子どもたちにとってわがことになるようなアイディアが必要…住民の日常の破壊、という視点

北海道からはロシアが近く、攻められるかも、という意識があった
物価や肥料代など経済面からも近づける

理解を深める

バンドゥーラの演奏者でチェルノブイリ元職員の家族の方の談話…人権や人の命・生活の変容が原点

“広島のG7サミットが、停戦・核廃絶を呼びかけることもできた”

どういった状況なら呑めるか？　仲介者は誰？…を考える（紛争解決学）